

| | |
|------------------|---|
| Title | 縄文文化の起源の研究 |
| Sub Title | Studies in origins of Jomon culture |
| Author | 江坂, 輝彌(Esaka, Teruya) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1956 |
| Jtitle | 史学 Vol.29, No.2 (1956. 8) ,p.71(183)- 100(212) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560800-0071 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

縄文文化の起源の研究

江 坂 輝 彌

一、序

日本における土器文化の起源は甚だ複雑多岐なものであり、いくつかの異つた系統の土器文化がわが日本列島の各地に各々異つた方向から傳播した形跡があり、それぞれの土器文化に隨伴してわが國に傳播した伴出の石器、骨角器などにも各々のものに全く異つた特徴が認められる。

また近年わが國に土器保有以前の古い文化の存在も漸次明瞭になり、この無土器文化の時代が上部洪積世の數萬年と云う永い期間に亘つて存続した文化であることも確認されつつあり、この文化の終末には石刃と石核よりなる小形石器があらわれることも明らかになつた。無土器文化研究者の間では、わが國最古の土器文化の中に、無土器文化の終末の石器の傳統が如何なる形で残るか、傳統の存否の探索が一つの重要研究課題になつてゐる。

わが日本列島に土器を知らない古代人が生活してゐたところへ、新しく周邊の各地から土器などの新しい文化を擔つた人々が日本列島の各地へ渡つてきた。前住の無土器文化人は新しく渡來した人々に追われることなく、渡來した人々から土器の製作技術をはじめ、それまでにこの日本列島では見ることのできなかつた新しい進歩した石器、骨角器など

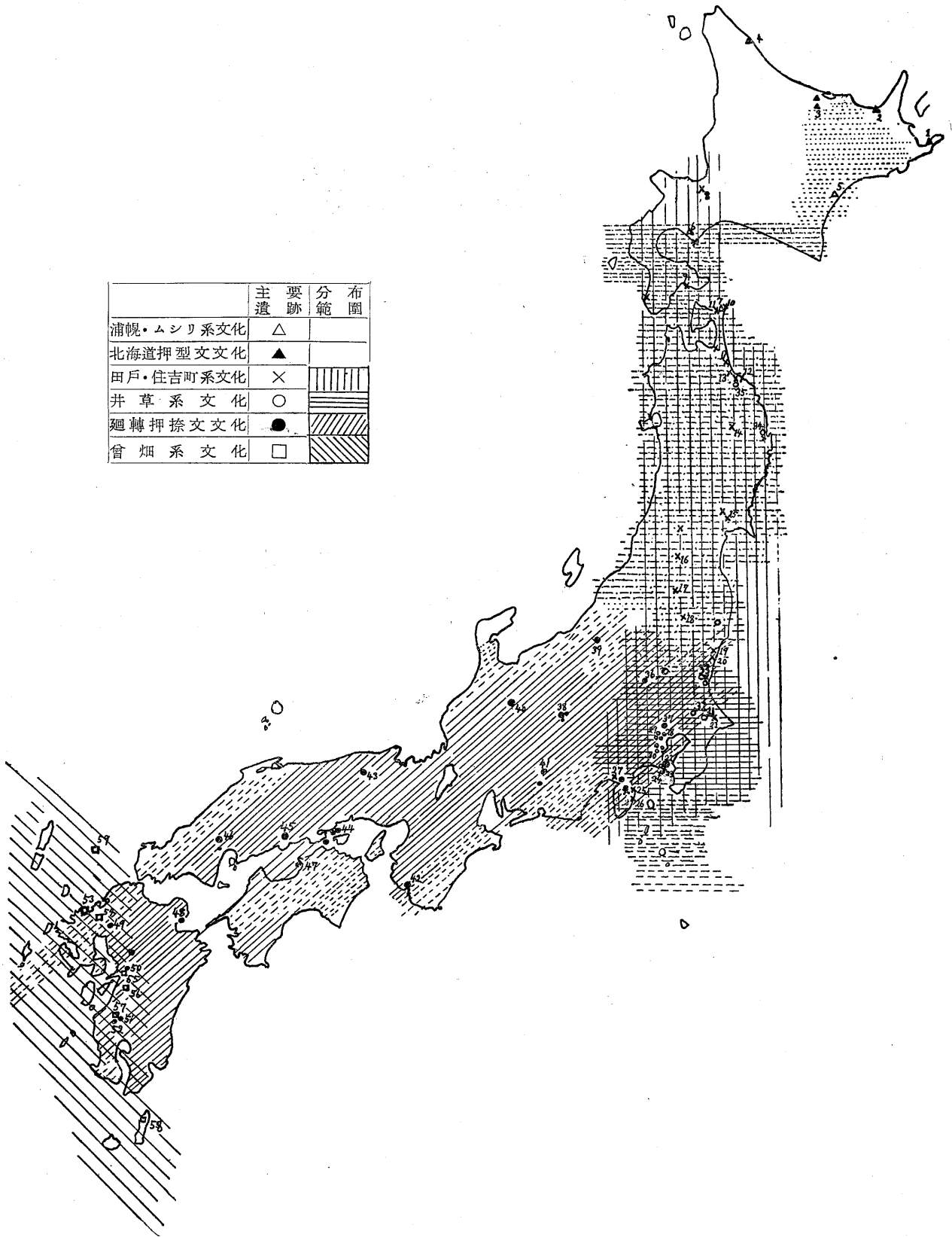
の製作技術や使用法を學んだものと思われ、日本列島の各地に居住していた前住の無土器文化人は、かなりの短い期間に土器製作技術を會得したものと想像される。

日本列島周邊の各方面から各々系統を異にした數系統の土器文化を、列島の各地へ擔つて來た人々は、それ以前からわが國の各地に居住していた無土器文化人の總人口に比すれば、比較にならぬほどの少數の人々であつたと思われる。そしてこの新しい渡來者はやがては前住の無土器文化人と融合し、遠いわれわれの祖先であると云われる縄文文化人、日本石器時代人の根幹をなしたものと思われる。

従つてそれぞれの地へ渡來した各々の土器文化は、先づ渡來地周邊の無土器文化人がこの製作手法を學び、これに類似の土器がつくられるようになり、これが部落から部落へと傳播し、土器製作技術は次第に奥地へも廣まつていつたものと思われる。そしてある部落では甲地へ傳來したものと、乙地へ傳來したものが、異つた方向から殆ど同時に傳播した場合なども考へられるところであり、またある地方ではAの文様技術からBの文様技術へと流行を轉換する場合もあり、また兩系文化を融合して獨創的なものへと進展させたところもあつたと考へられる。また傳來した文化の施文技術を利用して無土器文化人が獨創的な文様の施文を考案したものが、前住の人々の共感をよび、日本列島における初期の土器文化の中では最も廣い分布圈を持つたものもある。

わが日本列島の各地に分布した數系統の最古の土器文化の分布狀況は第一圖の如くである。

わが國に最も古く渡來したと思われる文化は井草系文化であり、現在までの研究結果ではこの井草系最古のものと思われる井草I式土器を出土の遺跡は、東京都板橋區茂呂町遺跡、千葉縣香取郡神崎町並木西之城貝塚^いなど、關東南部で



第一圖 日本列島における數系統の最古の土器の文化圏とその主要遺跡分布圖

僅かに發見されているにすぎないが、井草Ⅰ式に後續する井草Ⅱ式・大丸式の土器を出土する遺跡は横須賀市追濱夏島貝塚、横須賀市若松町平坂貝塚、横濱市南區六ツ川町大丸遺跡、川崎市千年字子母口貝塚、(貝層下黒土層) 東京都杉並區新町井草遺跡(舊大字井草の地名をとる) 東京都北區上十條清水坂貝塚(貝層下黒土層) 千葉市稻毛町鳥込貝塚(貝層下土層) 千葉縣西之城貝塚など南關東一圓に分布が認められ、最近では山梨縣南都留郡忍野村忍草で井草Ⅱ式土器を出土の遺跡が發見され、その分布圏は山梨縣東部にまで伸張していることが判明した。

井草Ⅰ式、Ⅱ式の土器は南關東周邊に限られ、北關東、中部地方太平洋岸などの近隣諸地域に全く發見されておらず、北關東の茨城縣水戸市周邊、宇都宮市付近などでは井草Ⅱ式に後續する夏島式、稻荷台式の土器を出土の遺跡は發見されておらず、井草系文化は夏島式の時期に至つて北關東へも伸張していつたものとも觀取されるが、この地域に井草Ⅰ式・Ⅱ式の遺跡が皆無であるかどうかはなお今後の精査に俟つて決定すべきことのように思われる。

また北伊豆の山岳地域には廻轉押捺文土器、田戸下層式土器など出土の遺跡は認められるが、井草Ⅰ式、夏島式、稻荷台式などの繩文または撚系文の施文された尖底土器のみを單純に出土する遺跡は今日までの探査では殆ど皆無に近い狀況であり、北伊豆以西の中部地方太平洋岸には廻轉押捺文土器を出土の遺跡さへ殆ど未發見の狀態にある。

このように稻荷台式までの分布を考へても井草系土器の分布は關東地方一圓に限られており、(第一圖横線の実線の部分) この文化の傳播系路は關東地方南部の海洋方面からとも推察され、伊豆七島、八丈島、小笠原諸島方面の探索も必要となつてくるようにも思われる。

南關東地方では第一表にも見られる如く、井草系の繩文・撚系文尖底土器文化に後續の文化として、貝殼腹縁文・沈

| | 夏島貝塚 | 平坂貝塚 | 大丸遺跡 | 西之城貝塚 | 野島貝塚 | 子母口貝塚 | 鳥込貝塚 | 清水坂貝塚 | 下組台上 貝塚 |
|----------------------------|--------------|-------------|-------------|-------------|------------|------------|-----------|------------|------------|
| 關山式 | 上部土層(VI層) | | | | | | | | |
| 花積下層式 下組式 菊名式 梶山式 | | | | | | | | | 貝層 |
| | | | | | | | | 貝層 | |
| | | | | | | | | | |
| 茅山式 三ヶ月山式 茅山式 野島式 | | | | | | | | | |
| | 上部貝層(V層) | | | | | | | | |
| | | | | | 貝層 | | 貝層 | | |
| 子母口式 | 中部土層(IV層) | | | | | 貝層 | | | |
| 田戸上層式 | 中部貝層(III層) | | | | | | | | |
| 田戸下層II式 | 下部土層(II層) | 表土 | | | | | | | |
| 三戸式(田戸下層I式) | | | | 上部 黒土層 | | | | | |
| 平坂式・花輪臺II式 | | 貝層 | 第三層 (上層) | | | | | | |
| 花輪臺I式 | | | | | | | | | |
| 稻荷臺式 | | | 第三層 (上層) | | | | | | |
| 夏島式 | 下部貝層(I層) | 貝層下 混土貝層 | 第三層 (中層) | 上部貝層 | | | | | |
| 井草II式・大丸式 | 下部貝層下 黒土層 | ローム層 | 第一層 (下層) | 下部貝層 | 貝層下 黒土層 | 貝層下 黒土層 | 貝層下 土層 | 貝層下 黒土層 | 貝層下 黒土層 |
| 井草I式 | | | | 貝層下 褐色土層 | | | | | |

第一表 南關東地方に於ける井草系土器と他系統の早期土器との出土層位表

線文の施文された田戸・住吉町系尖底土器文化がある。この貝殻腹縁文と篋状工具による刺突文、沈線文などを施文した田戸・住吉町系の尖底土器は伊豆半島より關東、奥羽地方を経て、北海道の西南部にまで分布し、この系統中の現在までに發見の最古と思われる形式の土器は、青森縣八戸市周邊で注意されているが、今日までの調査ではこの形式の土器の出土遺跡は八戸市周邊で數ヶ所と、岩手縣盛岡市近傍で一ヶ所發見されたのみで、北海道では未發見である。

また南關東地方の井草Ⅰ式、Ⅱ式、夏島式より新しい時期に、中部山岳地帯の東部に發生したのではないかと推察される廻轉押捺文土器文化は關東地方より中部山岳地帯を経て、近畿・中國・四國・九州地方にまで分布し、わが國の最古の土器文化としては最も廣範圍の分布圈を持つたものである。

この外西九州地方に分布する會畑式文化、青森縣下北郡東通村^{ひがしどおり}尻屋字ムシリ遺跡、北海道有珠郡伊達町北黄金^{つとさか}上坂遺跡、北海道十勝郡浦幌町新吉野遺跡などで發見の平底の最古の土器文化、また北海道根室郡和田村温根沼遺跡、斜里郡斜里町朱圓遺跡、枝幸郡濱頓別町豊牛遺跡などで發見の押型文尖底土器⁽⁶⁾など、本州全般には深い關係のない數系統の最古の土器文化が、日本列島の西南部や東北部に傳播している。なお、ムシリ、上坂、浦幌の平底土器文化は、今後の究明に俟たなければ不明の點が多いが、一系統のものではなく、各々が別系統のものであるかもしれない。また、浦幌式と同一形式の土器は最近網走市の近傍で發見されているとのことである。

以上第一圖に示した最古の土器文化について、その分布状態の概略を説明したのであつたが、縄文文化の起源をなす最古の土器文化は井草系文化、田戸・住吉町系文化、廻轉押捺文系文化の三つの土器文化であり、他の周邊地域に傳播した最古の土器文化は、縄文文化の成立には余り深い關係を持たなかつたものようである。

以下縄文文化の起源に直接關係ある文化について詳記し、縄文文化が如何なる道程をたどつて成立したものであるかを考察してみたいと考へる。また併せて周邊の文化が如何に展開して行つたかもその概略を記したいと考へる。

『第一圖の見かた』

第一圖の分布圖は實線の部分が現在の調査で、その系統の遺跡の發見區域、波線の部分は發見が予想されるか、断片的資料の發見區域、井草系の!-!-!區域は稻荷台式に後續すると思われる井草系と思われる、縄文または、撚糸文の施文された尖底土器の出土地、點線の部分は井草系文化の影響を受けて發生したのではないかと思われる、縄文、撚糸文の丸底の土器の出土地域。

主要遺跡地名(番號を記したものののみ)

- | | | | |
|----|---------------------------|----|---------------------------|
| 1 | 北海道根室郡和田村温根沼 (北海道押型文文化) | 18 | 西白河郡西郷村河内山字段の鼻 () |
| 2 | 斜里郡斜里町朱圓、西區 () | 19 | 茨城縣高萩市松岡町上宿字刈又坂 () |
| 3 | 紋別郡遠輕町學田 () | 20 | 多賀郡十王町(舊櫛形村)陣屋 () |
| 4 | 枝幸郡濱頓別町豊牛 () | 21 | 千葉縣香取郡小見川町木の内字城ノ台(貝塚) () |
| 5 | 十勝郡浦幌町新吉野 (浦幌式土器) | 22 | 神奈川縣横須賀市追浜夏島 (貝塚) () |
| 6 | 有珠郡伊達町北黄金、上坂 (上坂式土器) | 23 | 公郷町田戸 () |
| 7 | 青森縣下北郡東通村尻屋、ムシリ (ムシリI式土器) | 24 | 三浦市初聲町三戸 () |
| 8 | 北海道札幌市白石町 (田戸・住吉町系文化) | 25 | 静岡縣伊東市岡區上の坊 () |
| 5 | 函館市住吉町 () | 26 | 賀茂郡城東村奈良字峠 () |
| 10 | 青森縣下北郡東通村尻屋、物見台 () | 27 | 沼津市東澤田木戸上 () |

- | | | |
|----|------------------------------|---------|
| 28 | 東京都板橋區板橋七丁目稻荷台 | (井草系文化) |
| 29 | 杉並區新町、舊字井草 | (井草系文化) |
| 30 | 橫濱市南區六ツ川町大丸 | (井草系文化) |
| 31 | 千葉縣香取郡神崎町竝木城之台 (貝塚) | (井草系文化) |
| 32 | 茨城縣北相馬郡利根町早尾字花輪台 (貝塚) | (井草系文化) |
| 33 | 勝田市部田野ムジナ谷 | (井草系文化) |
| 34 | 岩手縣宮古市鍛ヶ崎町雲南前 | (井草系文化) |
| 35 | 青森縣三戸郡大館村十日市字赤御堂 (貝塚) | (井草系文化) |
| 36 | 栃木縣足利郡菱村黒川字普門寺觀音山 (廻轉押文系文化) | (井草系文化) |
| 37 | 埼玉縣北足立郡安行村吉岡字大原 | (井草系文化) |
| 38 | 長野縣岡谷市樋澤 | (井草系文化) |
| 39 | 新潟縣中魚沼津南町 | (井草系文化) |
| 40 | 岐阜縣高山市江名子ひじ山 | (井草系文化) |
| 41 | 長野縣下伊那郡伊賀良村立野 | (井草系文化) |
| 42 | 和歌山縣田邊市糸田、高山寺 (貝塚) | (井草系文化) |
| 43 | 兵庫縣美方郡村岡町 (舊兔塚村) 福岡たつけ平 | (井草系文化) |
| 44 | 岡山縣邑久郡牛窓町黃島 (貝塚) | (井草系文化) |
| 45 | 廣島縣芦品郡新市町常字宮脇 | (井草系文化) |
| 46 | 山縣郡上殿村上殿小學校庭 | (井草系文化) |
| 47 | 香川縣三豐郡仁尾町小蔦島 (貝塚) | (井草系文化) |
| 48 | 大分縣速見郡日出町早水台 | (井草系文化) |
| 49 | 佐賀縣神崎郡東背振村寺ヶ里戰場ヶ谷 | (井草系文化) |
| 50 | 熊本縣下益城郡城南町沈目字池頭 | (井草系文化) |
| 51 | 鹿兒島伊佐郡菱刈町田中字白坂 | (井草系文化) |
| 52 | 大口市 (舊羽月村) 鳥の巢字手向山 | (井草系文化) |
| 53 | 佐賀縣唐津市唐津港海底 | (曾畑系文化) |
| 54 | 神崎郡三瀬村三瀬字宿 | (曾畑系文化) |
| 55 | 熊本縣宇土郡宇土町 (舊花園村) 岩古曾字曾畑 (貝塚) | (曾畑系文化) |
| 56 | 下益城郡松橋町 (舊豐福村) 兩仲間字宮島 (貝塚) | (曾畑系文化) |
| 57 | 鹿兒島縣大口市 (舊山野町) 小木原字日勝山 | (曾畑系文化) |
| 58 | 鹿兒島縣熊毛郡西之表町 (種子島) | (曾畑系文化) |
| 59 | 福岡縣宗像郡大島村沖ノ島 | (曾畑系文化) |

(註)

- (1) 西村正衛他、千葉縣西之城貝塚 石器時代第2號昭和30年10月。
- (2) 岡本勇 相模平坂貝塚 駿臺史學第3號昭和28年3月。
- (3) 矢島清作 東京都杉並區井草の石器時代遺跡

——井草式土器について——古代文化第13卷第9號昭和17年9月。

(4) 清水坂貝塚貝層下より出土の井草Ⅱ式土器一片は筆者が昭和5年頃清水坂崖面露出貝層下で採集したもの、従つて昭和9年の人類學雜誌49卷5號の鈴木尙氏報告には未掲載。

(5) 山本壽々雄 山梨縣における早期初頭の縄文土器について、

——忍野村忍草の場合から——石器時代第3號昭和31年3月。

(6) 兒玉作左衛門、大場利夫 根室國溫根沼遺跡の發掘について、

——溫根沼式押型文遺跡——北方文化研究報告第11輯昭和31年3月北海道大學。

二、本 論

1 井草系文化と廻轉捺文系文化

井草系文化で井草Ⅰ式土器が、今日までに發見の土器形式中では最古のものであるらしいことは、第一表にも記した西之城貝塚の層位的出土例によつても考へられるところであるが、井草Ⅰ式土器を出土する遺跡は今日までにまだ數ヶ所より發見されておらず、また井草Ⅱ式などの層位關係を知り得た遺跡も未だ前記の一遺跡であり、出土土器も極めて僅かであり、伴出の石器、骨角器にどのようなものがあるかも今日までの調査では皆目不明であり、今日までの研究結果では井草系の文化に、井草Ⅱ式・大丸式などと呼ばれる土器形式よりさらに古い一形式が存在する如くであるから、さらに精査究明の必要があり、今後の研究成果に俟ちたいと云うところである。井草Ⅱ式・大丸式土器の出土遺跡は南關東地方の各地に發見され、第一表に示す如く、他形式の土器と層位的に出土している遺跡もかなり多く、その編年

的位置も井草Ⅰ式につぐ最古の土器形式であることは疑いないところであり、伴出の石器としては、手頃な扁平で細長い川原石の片面先端部の一方を、あらく打ち缺き刃を付すか、または先端部の一方片面を研磨して刃を付した単純な削具と思われる石器があり、刃先はその殆どが片刃といつてよく、もろ刃のものはきわめて少い。石材は比較的硬質で重量のある、角閃岩、閃綠岩、石英斑岩などの半深成岩類と思われる火成岩を用いたものが多いが、なかには頁岩、粘板岩などの硬質な水成岩を用いたものもある。今日までの調査で判明した石器は Adze (削具) とも思われる Pebble-tool (礫器) のみにて、石鏃、スクレイパーの如き Flake-tool (剝片石器) や、Axe (斧) と思れる如き石器は未発見である。また夏島貝塚、西之城貝塚の井草Ⅱ式土器片の出土層からは、今日までの調査では骨角器は発見されなかったが、今後の調査で何等かの骨角器が発見されるものと考へている。

夏島式土器を出土する遺跡からは前記の礫器のほかに拳大の石を打ちわつて製作した、Axe として用いられたと考えられる礫核石器が出土し、夏島貝塚の夏島式土器を出土する第一層 (下部貝層) からは、鳥の肢骨をたてに截断して製作したかと思われる小型有孔骨針、骨鏃、尖頭器などの特異な骨器が出土している。この貝層からは鹿角を加工した角器は全く見出さなかつたとのことである。

また西之城貝塚の上部貝層からは夏島式土器片と共に手頃な扁平で細長い川原石の一端を局部磨製した片刃の礫器と猪の牙で作つた磨製片刃の削具が一個出土している。片刃局部磨製の石器と同一用途に使われたものであろうか。

夏島式土器を出土した夏島貝塚の下部貝層 (第一層)、東京都世田谷區船橋町遺跡⁽¹⁾、川崎市生田神明山遺跡⁽²⁾、東京都昭島市拜島町林ノ上遺跡などの發掘調査では縄文と撚系文以外の文様の施文された土器は一片も認められなかつた。とこ

ろが東京都板橋區板橋七丁目稻荷台遺跡^(註)を發掘調査した折りは一小片であつたが、稻荷台式土器と同一層位から山型押捺文土器片が出土している。また稻荷台遺跡は日本化工株式會社でグラウンド整地作業中に包含層の一部が發掘されたために發見された遺跡で、表面採集中にも稻荷台式土器片に混じて數片の山型押捺文土器の小破片が混じていた。稻荷台遺跡出土の稻荷台式土器には無文土器もかなりの量出土している。

かつて白崎高保氏が栗原式と命名し、稻荷台式につぐ古式土器と考へた板橋區上板橋町七丁目栗原遺跡發見の土器は無文土器が大半をしめ、その中に口縁部に一條の沈線をめぐらせたものなどが若干認められ、また條と條の間隔のひらいた稻荷台式に近似の捺系文土器片も僅かに出土し、またこれに山型押捺文土器片も數片發見されている。板橋區清水町出井遺跡も栗原遺跡と類似の土器を出土し、山型押捺文の施文された小土器片も發見されている。栗原遺跡からは手頃な扁平な細長い川原石を利用した片刃の局部磨製の *Pebble tool* が數個出土しているほか、高さ一糎内外の整三角形に近い小型石鏃と、高さ二糎、底徑一糎内外の底邊に淺いわたくりのある二等邊三角形石鏃がかなりの量認められ、中には底邊の中央部から石鏃の中心部に向つて兩面局部磨製したものもいくつか認められた。⁽¹¹⁾ 石鏃の中心部を何がために磨製するのか、その目的は知り得ないが、この時期の石鏃にこのような變つた特徴のあることは注意すべきである。清水町出井遺跡からも同形の石鏃がかなりの量發見されている。なお石鏃の中央部を兩面磨製したものは岡山縣邑久郡黃島貝塚などの押捺文土器遺跡からも發見されている。

またこの無文土器を主とする遺跡から出土した如き石鏃は茨城縣花輪台貝塚からも多數發見されている。⁽¹⁰⁾ 花輪台貝塚からは栗原遺跡出土の土器に類似の花輪台Ⅱ式と呼ぶ無文土器群と、口頸部に一條乃至數條の繩狀圧痕文を施文し、そ

の下に同じ縄文原體を隣接して縦、横に廻轉押捺して施文した特殊な羽狀縄文が見られる花輪台Ⅰ式土器と呼ばれる土器が出土するが、前記の石鏃はいづれの形式の土器にも伴うものであるらしい。

また擦痕文ある無文土器を出土する平坂貝塚の貝層からは内鉤のある鹿角製釣針やスズキ、マグロ、クロダイ、アジ、マイワシなどの魚骨が出土しており、夏島式の時代より魚類の種類も多く、漁法が一段と進歩したようにも感ぜられる。また平坂貝塚の無文土器出土層からは山型と格子目の押捺文土器が出土している。

無文土器が多く、それにわずかではあるが撚系文、山型押捺文などの施文された小土器片が伴出する小遺跡は北關東地方の赤城山麓方面で各所に發見されており、東毛考古學研究所の相澤忠洋氏ただひろが調査した桐生市桐生が丘新公園遺跡はその代表的なものである。本遺跡からも栗原、出井遺跡などに見られたような石鏃が相澤氏によつて多數採集されている。また新公園からは廻轉押捺文土器に伴出する鋏形石鏃(12)もいくつか發見されていた。

桐生市桐生丘新公園遺跡と桐生川を挟んで對岸にある栃木縣足利郡菱村普門寺遺跡は桐生工業高校の蘭田芳雄氏が昭和二二年以來鋭意調査された遺跡で、東京大學理學部人類學教室の山内清男、酒詰仲男、渡邊仁氏なども本遺跡を調査し、酒詰、渡邊氏によつて人類學雜誌上にも報告された遺跡であるが、本遺跡の最下層部からは無文土器と山型押捺文土器が相當量出土しており、山型の頂點を對象的に逆に施文原體に彫りこんで、格子目狀の押型を土器面に押捺したものが數片認められると記されているが、他遺跡に見られるような一般的な格子目押捺文、楕圓押捺文は一片も出土していないようである。石器は、刃部打製、局部磨製の礫器、石鏃及びその他の小形剝片石器があり、小形剝片石器中にはスクレイパーや尖頭器などに用ひられたと思われるものあり、このような石器は他の押捺文遺跡にも見られる、一見不整

形の如くで、一應のタイプを持つ、その用途と機能に應じて製作した小形剝片石器で、刃部の位置などを考察し、形、用途に應じて細分して研究する必要のある注目すべき石器であると考へる。

なほ栗原、清水町出井、花輪台、桐生市新公園などの無文土器遺跡の特徴ある小形石鏃のその殆どはチャート製であり、山型押捺文土器の多い普門寺遺跡ではチャートのほかに頁岩、砂岩、黒燿石などのものもかなり認められたようである。

また昭和一五年吉田格氏などで調査した埼玉縣安行村大原遺跡⁽⁶⁾は山型文と格子目文の押捺文土器、及び撚糸文土器、田戸下層Ⅰ式土器、上層より前期末の諸磯C式土器片などを出土し、下層出土の山型、格子目押捺文、撚糸文、田戸下層Ⅰ式土器は同一時期に同時作られ使用されたものか、時期を異にするものが重複したものであるか、詳かでないが、平坂貝塚では田戸下層式と思われる小土器片は表土から出土し、山型、格子目の押型文土器片は貝層下部及び貝層直下、下部混土貝層上半に亘つて出土しており、時期を異にすることを明瞭に示している。

なお大原遺跡では山型押捺文に比して格子目文の施文された押捺文土器片の出土量は極めて少かつた。

また芹沢氏によれば夏島貝塚の田戸下層式土器出土層からは楕圓押捺文と、梯形(芹沢氏は截頂三角形と記す)押捺文が出土していると記し、三浦市三戸遺跡出土の山型、格子目、楕圓押捺文土器片、横須賀市田戸遺跡出土の山型と楕圓押捺文土器片は、それぞれ三戸式、田戸下層式に伴存したものではないかとしている。⁽⁷⁾

以上記した押捺文土器片出土遺跡のなかで三戸遺跡を除いたすべての遺跡は、出土量に多少の差こそあれ、縄文乃至は撚糸文の施文された井草系の土器片が出土している。

第二表は全國における山型、格子目、橢圓、其他の押捺文土器、繩文、捺糸文、田戸下層Ⅰ式、Ⅱ式、薄手無文土器、捺痕文土器、無文土器 伴出石器などの伴出組合せ表であり、この表によつても押捺文土器が捺糸文、繩文などの井草糸土器及び無文土器に關連深いものであることが明らかである。

埼玉縣浦和市東方の低い洪積台地上には山型押捺文土器を出土する遺跡は小遺跡であるが各所にあり、安行村大原遺跡程度の規模のものもいくつかある。

芹沢氏は「格子目・山形↓格子目・山形・橢圓↓山形・橢圓」の組合せで關東地方における押捺文土器の文様は変遷したと記しており、更に格子目・山形の組合せの前に、普門寺遺跡例の如き、山形押捺文のみの時期のあることを想定しているが、當を得た考へ方である。押捺文土器としては最も新しい時期のものと考へられる鹿兒島縣大口市鳥とすの巢、手たけやま向山遺跡においても橢圓と山型押捺文の施文されたものが多く、これは關東地方のみでなく押捺文土器分布圏の全般的な傾向ではなからうか。

芹沢氏はまた『捺糸文と捺型文とが同じ廻轉手法によること、捺糸文土器の遺跡に捺型文土器が混在すること、また中部地方の捺型文遺跡からもかなりの捺糸文を伴出する等の理由から、捺糸文土器こそ捺型文土器の母胎であると考へた。』と筆者の考へを非難し、捺糸文と押捺文土器を異つた土器形式群と考へ、田戸住吉町系と三つの異つた土器形式郡を主張している。

筆者は第二表にも記す如く、橢圓押捺文の施文された土器が比較的少い、山型、格子目押捺文の施文された土器の多い、砲彈形尖底の押捺文を出土する遺跡に捺糸文、繩文の施文された土器が多く、また數こそ少いが、大分縣早水台（8）、

第二表 各地における出土土器文様の組合せと伴出石器

| 遺跡地名 | 稻荷台 | 栗原 | 大原 | 花輪台 | 桐生丘公園 | 普門寺 | 三戸 | 田戸 | 夏島Ⅰ層 (田戸下貝層) | 伊豆平井 | 信濃樋澤 | 伊豆上ノ坊 | 下り林下層 | 立野 | ひじ山 | 黄島 | 小蔦島 | 宮脇 | 早水台 |
|---------------------|--------|----|----|-----|-------|-----|----|--------|-----------------|--------|------|-------|-------|----|--------|----|-----|--------|-----|
| 擦糸文 | ◎ | △ | △ | ○ | △ | ○ | | △ | | ○ | ○ | ○ | △ | △ | | △ | △ | △ | ○ |
| 繩文 | ○ | | △ | ○ | △ | | | ○ | ○ | | ○ | | △ | | | | | | |
| 薄手無文 | | | ○ | | ○ | ○ | | | | | △ | | | | | | | | |
| 擦化文 | | | | | △ | ◎ | | | | | | | | | | | | | |
| 無文 | ○ | ◎ | | ◎ | ○ | | | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |
| 山型文 | 1 △ | △ | ◎ | | △ | ◎ | ○ | 1 △ | | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ◎ |
| 格子目文 | | | ○ | | | △ | △ | | | | △ | | ○ | ○ | ○ | △ | △ | | △ |
| 楯圓文 | | | | | | | ○ | ○ | △ | ◎ | ○ | ◎ | | △ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ |
| 市松文 | | | | | | | | | | | | | | ◎ | | | | | |
| 特殊押捺文 | | | | | | | | | 1 △ | 1 △ | | | | | 1 △ | △ | △ | △ | |
| 戸田下Ⅰ 〔貝殻腹縁文・沈線文〕 | | | | | | ○ | ◎ | | | | | | | | | | | | |
| 田戸下Ⅱ | | | | | | | | ○ | ◎ | | | ◎ | | | | | | | |
| 特殊羽狀繩文 | | | | ◎ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 局部磨製礫器 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | 1 △ | | | | | | | | 1 △ | ○ |
| 小型剝片石器 | | | △ | △ | | ◎ | ○ | ○ | | △ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ |
| 石鏃 | | ◎ | △ | ◎ | ◎ | ◎ | | ○ | | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

◎印は多
○印は普通
△印は僅少

廣島縣宮脇遺跡⁽⁸⁾などからは片刃局部磨製の礫器も出土しており、當時の南關東の海岸地方へ、いづこから渡來した井草系文化は、急速な勢いで南關東地方一圓に居住する無土器文化人の間に土器製作技術や、新しい石器の作り方、などを傳播して行つたものと推定され、北關東地方の太平洋岸、茨城縣勝田市附近、宇都宮市近傍、桐生市方面などには、夏島式、稻荷台式土器を出土する單純遺跡が認められる。この稻荷台式文化の終末頃、埼玉縣浦和市近傍から群馬縣桐生市近傍に居住していた無土器文化人の子孫の人々が、細い丸棒に撚糸をコイル狀に捲きつけ、この施文原体を土器面に廻轉押捺して施文する撚糸文を施文中に、何か偶然の機會に丸棒自体に彫刻して、その刻文の圧痕を土器面に施大すると變化ある文様が施文されることに氣付き、これが西關東から中部山岳地方を経て、近畿、中國、四國、九州と無土器文化人の間に土器製作技術と共に次第に拡つたものではなからうか、従つてこの押捺文文化の前半には、母胎となつた撚糸文文化の、撚糸文、繩文の施文されたものも残り、井草系土器と共に傳へられた片刃局部磨製の礫器も、押捺文土器出土遺跡から時として發見されるのではないであらうか。

廻轉押捺文土器文化は井草系文化を無土器文化人が受け入れて、自分達のものとして發展させた最初の土器文化で、その石器は井草系文化と共に傳播したものよりも、傳統ある小形のフレイク・ツールの方が鋭利で、便利であり、これらのものが多く使われたのであらうか。

筆者は井草系文化と廻轉押捺文系文化は以上に記した如く密接不離の關係にあるものと考へている。

しかし東南アジア圏には山型押捺文に近似の文様を持つ土器も見られるようであり、押捺文土器がわが國の無土器文化人によつて、獨自に發明された文様であるか、繩文、撚糸文と共に井草系土器文化を傳へた人々から學んだものである

かは、今日の調査では詳かになし得ない。若しも井草系文化人によつて傳へられた施文法であるとすれば、彼等は捺糸文、縄文の如く好んで施文した文様でなく、なにか特殊な用途の土器などに僅かに施文していたものが、わが國に先住の無土器文化人には捺糸文や縄文より押捺文の方が嗜好に合ひ、この種文様が流行するに至つたものとも想像せられるが、井草Ⅰ式、Ⅱ式、夏島式土器出土遺跡で全く押捺文土器片の發見されておらぬ今日、山型押捺文が先づ西部關東地方で發明され、續いて格子目があらわれ、最後に楕圓が發明され、次第に西日本の無土器文化人の間にこの土器文化が擴つたものと解した方が妥當のように思われるが、一方前記の如き考へかたも出来るかもしれぬと云うことを、將來の研究課題としておきたい。

また井草Ⅰ式の渡來時期は、瀬戸内海に黃島、黒島、井島、豊島貝塚などハイガイ、ヤマトンジミを最多とした鹹度の低い貝塚がつくられた時期よりも更に逆上つた時代で、瀬戸内海への海浸が、また黃島附近にまで達しなかつた時代であり、太平洋岸の水陸の分布、海岸線の狀況は、今日と大變異つており、陸地面積は今日より廣大であり、井草系土器文化がいつれの方面から渡來したかは全く不明であるが、今日の地形をもつて想定することは大きな誤りを犯す基ともなるので、先づ當時の海岸線の想定、島嶼の狀況などを地史學上から究明することが、渡來系路究明の第一段階と考へる。また井草系の遺跡が大平洋岸の陸棚地域の海底からも發見される可能性があると思つてゐる。

關東地方では第一表にも見られる如く稻荷台式文化以後に平行沈線文、刺突文、貝殻腹縁文などの施文された田戸住吉町系文化の文様を持つた土器が流行する。

この土器が捺糸文との間に無文土器の時期を挟むのであろうか、井草系文化の土器と田戸住吉町系文化の土器が層位

的に出土した遺跡は第一表にも記した如く、夏島、平坂、西之城の三貝塚のみであり、西之城貝塚の貝層上部からは夏島式の土器片に混じつて、稻荷台式土器片も若干出土したが、稻荷台遺跡に見られた如く、口頸部に一條の沈線文のみある無文土器片などは全く出土しておらず、今日までの三貝塚だけの調査結果では、稻荷台式後半、花輪台Ⅰ式、Ⅱ式、などの形式と田戸下層Ⅰ式（三戸式）田戸下層Ⅱ式、田戸上層式の諸形式は、前者が先行の文化で、花輪台Ⅰ式の後に田戸下層式が連り、時代順に一系列に並び、關東では一連の文化として変遷するものであるか、或は稻荷台式文化の後半頃には、奥羽南部から北關東地方まで、奥羽北部から既に田戸住吉町系文化が到達し、關東地方で聚落を異にし、または地域を異にし、二つの形式の文化が併存することがないとは斷言し得ないと思うのであるが、なおこれらについては、今後の層位的出土例の増加と、早期初頭の遺跡の地域的調査が綿密に行われた後、明らかにしたいと思つてゐる。一時的な併存、そして兩文化の融合と云う道程が、繩文文化の成立に深い關係があると考へられ、繩文文化の起源を探究するためにも、各地の早期遺跡の地域調査の進展が待たれるのである。

(註)

- (1) 野口義膺、東京都世田谷區千歳遺跡調査報告 上代文化第21輯・昭和26年12月。
- (2) 吉田格、川崎市神明山遺跡概報 人類學雜誌第61卷2號・昭和25年1月。
- (3) 白崎高保、東京稻荷台先史遺跡 古代文化第12卷第8號・昭和16年3月。
- (4) 藪田芳雄、普門寺觀音山包含地遺跡調査概報 兩毛古代文化第1集・昭和24年6月。
- (5) 酒詰仲男、渡邊仁、栃木縣菱村普門寺遺跡發掘概報 人類學雜誌第61卷第1號・昭和24年9月。
- (6) 吉田格、埼玉縣大原遺跡調査報告 古代文化第12卷第2號・昭和16年2月。
- (7) 芹澤長介、關東中部に於ける無土器文化の終末と繩文文化の發生とに關する予察。駿台史學第4號・昭和29年3月。

八二頁—八三頁參照。

(8) 八幡一郎、賀川光夫、早水台。大分縣文化財調査報告第三輯 大分縣教育委員會・昭和30年6月。

(9) 豐元國、桑田五郎、備後宮脇石器時代遺跡について—特に細石器押型文土器の図解を中心として— 吉備考古第77・78・79号・昭和23年1月昭和25年1月。

(10) 吉田格、茨城縣花輪台貝塚概報 日本考古學第1卷第1號・昭和23年1月。

甲野勇、吉田格、繩文式文化編年図集花輪台文化第一回配本・山岡書店昭和24年11月。

(11) 芹澤長介、半磨製石鏃に就いて 考古學集刊第3册・昭和24年11月

(12) 八幡一郎、鏃形石鏃——石鏃の最古型式の一——日本考古學第1卷第1號・昭和23年1月

(2) 田戸住吉町系文化

田戸住吉町系の尖底を最初に注意したのは赤星直忠氏で、一九二九年發行の考古學雜誌上に『相模三戸遺跡』なる報文を發表されている。⁽ⁱ⁾赤星氏はこの報告の中で

『三浦半島としてはまだ類例がないから假に三戸式とも呼んで、條痕を有する纖維土器と區別しておく。不勉強で他地方の類例も知らない。しかし古式土器として研究されて來た條痕を有し纖維を含む土器を混在(地表面にて)していた一種の土器であるから或は纖維土器に續くものであるとも思ふ。』

と記され、氏は當時は纖維を器壁中に含んだ、貝殼條痕文の施文された茅山式土器に後續する形式ではないかと推察された。

其後當時東北帝國大學醫學部解剖學教室に勤務されていた山内清男氏が、一九二九年夏、伊東信雄氏が北海道方面を

旅行され、札幌の河野常吉氏のもとで、函館市住吉町遺跡から出土した貝殻文の施文された土器片を見、歸路伊東氏は同遺跡を實査し、數十片の土器片を採集して歸仙されたものを一見され、この中には繊維の混入のある土器が一例もない。縄文もない、そして貝殻條痕が内外面に見られ、また貝殻圧痕がある。口頸部の文様はアカガヒの刺痕などからなっている。また椀木1.2.の如き古式土器と手法を同じくしている點があるなど山内氏の非常に興味を引くところとなり、山内氏は伊東氏と共に同年九月二二日住吉町遺跡の發掘調査に向はれた。

そして山内氏はその結果の概要を、一九三〇年發行の史前學雜誌上に報告され

『ここから出土した土器の大多數は伊東君の採集品と同じく、繊維の混入のない、縄紋のない土器であつて、正に一型式(住吉式)として制定さるべきものである。土質。砂粒を含み、硬く、もろい。巻上げによる成形の痕跡がある。形態は、縦斷面の多少凸彎する圓錐形、口頸部の彎曲は全くない又は乏しい。特に注意すべき事は、底が皆乳嘴狀をなして尖つて居る(二十余例)ことである。平底その他は一例もない。口端には小突起があることと、ないことがある——中略——

この種の土器は貝殻條痕、同刺痕、縄紋皆無、土質等に於て椀木1に近似を持つ。殊に後者に一例ではあるが乳嘴狀の底部小破片あることはこの關係を彩るものである。余は住吉式が椀木1と近縁のものであつて、それと同様に縄紋及び繊維以前である感を深くするのである。——中略——

本遺跡の遺物整理中、赤星直忠氏によつて相模、三戸遺跡の報告(考古學雜誌十九卷十一號)が發表された。同氏の記述によると、この貝塚から(筆者註貝塚ではない、山内氏が當時誤認されたもの)(一)繊維の混入のないものと、(二)あるもの(少量)が出る。——中略——纖維を含まない土器は、氏が三戸式と命名せられた。この地方に未だ知られて居ない一型式である。この型式の特徴のうち著明な點は、形態に於て底が尖つて居ること、裝飾に於ては縄紋の皆無な點であらう。共に椀木1及び住吉式に認められるのは偶然とは思われぬ。——中略——赤星氏はこの三戸式は「古式土器として研究されて來た條痕を有し、繊維を含む土器を混在(地表面にて)していた土器であるから、或は纖維土器につづくものであるかとも思う」と云れて居るが、私には上記椀木1、住吉のものと同

様、恐らく繩紋以前纖維以前のものと考へられるのである。』

と記し、これらの尖底土器が、當時古式土器と考へられていた纖維を器壁内に含有した繩文、貝殻條痕文の施文された繩文土器よりも、さらに古い時代のものであることを指適された。

しかし山内氏も一九二九年五月、史前學雜誌第一卷第二號に『關東北に於ける纖維土器』を發表された時には、器壁内に纖維を入れた土器以前に、纖維を器壁内に入れない尖底深鉢の土器が存在することは氣付かれなかつた模様で『槻木町貝塚の土器』の項で、『この貝塚から發掘した土器には、(一)粗大で、纖維の混入する土器と、(二)より薄く、纖維の混入のない、又は著しくない土器がある。前者はこの材料の大多數を占めるが、後者は稀であつて、水洗いに際して漸く檢出されたものである。

——中略——

二、以下の土器に伴出する薄手の纖維のない土器は總數十片位、文様のあるものが大部分で、繩紋のある例は一例もない文様には(一)細い隆線からなる文様のあるもの數片。一個體に屬するらしい。(二)口頸部に刺痕列からなる文様あるもの。——中略——(三)刺痕列及び單獨刺痕あるもの一片。(四)浅い溝及び單獨刺痕あるもの等がある。——中略——この種の薄い土器のうち(一)の例には内面に條痕があるが、他にはない。以上條痕、隆線文様、刺痕列文様等、兩種の土器には共通の手法が認められるから、この貝塚から出土する粗大土器とより薄手の土器とは同時に行はれたものと見るのが適當である。』

と記されており、この年の九月の住吉町の調査や、一月に赤星氏の發表された相模三戸遺跡の報文を見て後に、纖維土器以前に纖維を含まない深鉢尖底の存在することを氣付かれたのではなからうか。

山内氏は前記報文では槻木1式と2式が同一層から伴存して出土したように記されているが、一九三二年九月發行のドルメン第一卷第五號の『日本遠古之文化 II 繩紋土器の起源』の中では、『この新發見の型式を出す陸前の一貝塚の下層から、繩紋も無く、纖維混入のない土器が發見されるに至つた。かくて纖維混入のある土器を最古の繩紋土器とする所見は全く崩壊し、それ以

前の土器を新に捜査する必要を生じたのである。その結果、北海道函館、陸奥、關東に於て從來の管見に觸れなかつた一群の土器型式の發見が行われ、古式繩紋土器研究は一つの進展を見たのである』と記されており、最初の調査では氣付かれず、發掘土器片を水洗中に異つた型式の土器片が僅かに混在していることに氣附かれた程度であつたが、後の調査で槻木1式は貝層下部乃至は貝層下より出土し、槻木2式と層位的に出土することをつきとめられたのである。

また山内氏は同報文中で『最も古い繩紋式土器を大陸のものと比較するのは、既に独自の分化を受けた後代の繩紋式土器を以てするよりも遙かに適切である。——中略——歐亞大陸の新石器時代の新しくない區分に於いて尖底を有し、平底を伴はぬ土器のあることも看過する譯には行かない。この仲間は北歐に於いては貝塚時代及び聚落文化に見られ、東北方では年代の遅れた（西紀前二十五世紀位）櫛目土器がそれである。後者の分布はバイカル湖まで追跡されて居る。このシベリアの櫛目土器と朝鮮の有紋の土器との近似は大山氏、清野博士に依り、又近年藤田氏によつて注目されて居る。又一方朝鮮に於けるこの種の土器と北九州の彌生式の一型式との近似が最近中山博士によつて論議され出した。是等の所論の當否は未だ確かめられないが、歐洲で西紀二十五世紀の文化が、日本に來て西紀前後になり彌生式に編入される等とは考へ難い。同じ比較をするならば、尖底を有する古き繩紋土器を持ち出すのがより適當だらうと思ふ。その古さは彌生式よりも繩文土器三十型式だけ遡つた年代である。しかし繩紋土器の起源が、果して歐亞大陸の新石器時代文化の一環を形成するか否かを決定するには、尙幾多の年月を待たねばならないであらう』と記されている。

また一九三八年三月に誠文堂新光社發行の日本文化史大系第一卷に八幡一郎氏が『繩文式文化』を執筆されており、その中で八幡氏は『私は少くともその一部はシベリア方面から入り込んで來たと考へている。シベリアには後期舊石器時代の頃から人類が繁榮してをつた形迹があり、それに續くところの中石器時代文化もヨーロッパと連絡しつゝ擴がつてをつたかと思はれる。シベリアは洪積世末期は永河北退後において今日よりも遙かに氣候温暖であつた。そして廣大な草原が擴がつてをり、中石器時代人が生活するのに相應しい状態を呈しておつた。この中石器文化並びに之を負つた人々が日本に入つて、繩文式文化の基底となつたのではなからうかと私は解するのである。——中略——

最後の捺截石器が黎明期よりあつたか否かは未だ十分に明かにされてをらないが、北海道の該期一遺跡からこの種遺品が採集されたことがある。——中略——ここに附記すべきは捺截手法による磨製石器はシベリア一帯に分布し、その原料としてネフライトが利用されてをり、日本群島では奥羽及び北海道にこの種石器が分布、ネフライトに似た緑色のグラウコフェンシストが材料となり、彼此相通ずる性質を具えていることである。』と記され、住吉町式文化の祖源的なものはシベリヤ方面の中石器文化であることを暗示された。

以上田戸住吉町系文化の發見史と、この文化が東北アジアの櫛目土器文化に關連あるものであるとの一九四〇年代までの諸先輩の予想とその業績について、要點を再録したのであつたが、その後は一九四八年秋、筆者が八幡氏に従つて青森縣下北半島の最花貝塚さいはなの調査に参加し、これを機會として青森縣太平洋岸の田戸住吉町系遺跡の探查と發掘調査を開始するまでは、この方面の調査研究にはさして大きな發見もなく、また報告書類も公刊されなかつた。ただ一九三八年六月七月、東北大學の伊東信雄氏が調査された宮城縣素山貝塚で、貝層下から田戸下層式近似の土器が數片出土したことが注意され、一九四〇年に發刊の報告書(註)に『沈線文土器は、此等條痕土器・繩文條痕土器と趣を異にし、繩文及び條痕を有する事が無く、單に沈直線文又は貝殼刺文を有するのみであり、而も後者よりも下層から發見されて居るのである。——中略——これが田戸下層式と極似して居る事は、山内氏の推論を具体的に裏書するものとして、興味深い事と言はねばならぬ。』

従つてまた沈線文土器は、北海道の住吉式とも並行する事となる。住吉式には素山のものや、田戸下層式に見られる様な沈直線文は少いが、赤貝屬の腹縁部による刺文が非常に發達して居て、沈線文土器と一部共通の裝飾手法を示して居る。東北地方には沈線文土器を豊富に出す遺跡はまだ知られて居ないが、同じ時期の土器を豊富に出す遺跡は、關東

地方及び北海道地方には既に発見されて居るのであつて、其の間である東北地方にも将来発見の可能性が充分にある。青森縣からは是川村中居と三戸郡市川村轟木から貝殻刺文の土器が発見されているが、これは素山のものより住吉式に近いものである。』と記され、宮城縣下一ヶ所と青森縣下一ヶ所のこの系統の新遺跡を紹介されると共に、奥羽地方でこの時代までに発見された資料はいづれも一遺跡から數片乃至は一〇片内外と云う斷片的なもののみであつたが、伊東氏は将来奥羽地方にもこの系統の土器を多量に出土する大遺跡が発見される可能性が大であることを力説されたのであつた。しかして一九四九年六月筆者が下北半島の早期初頭の遺跡の探索を開始して以來、八年を経過した今日では秋田縣を除く奥羽地方各縣に、この系統の尖底土器の遺跡が地元の研究者により各所に発見されるに至つており、秋田縣下でも地元研究家の活動が始まれば近い将来に各所で発見されることと考へている。

一九四九年、青森縣下北半島尻屋崎近傍で、物見台、ムシリ、吹切沢遺跡を発見以後、八戸市周邊では八戸市鮫町白浜遺跡、同町小船渡平遺跡、市外三戸郡大館村館平遺跡などを發掘調査し、また八戸市高館、同鮫町下松苗場、同町蕪島、三戸郡名川町森ノ越館場などの諸遺跡についても、一應の調査を行つており、下松苗場、高館遺跡などは今後できれば發掘調査を行いたいと思つている。

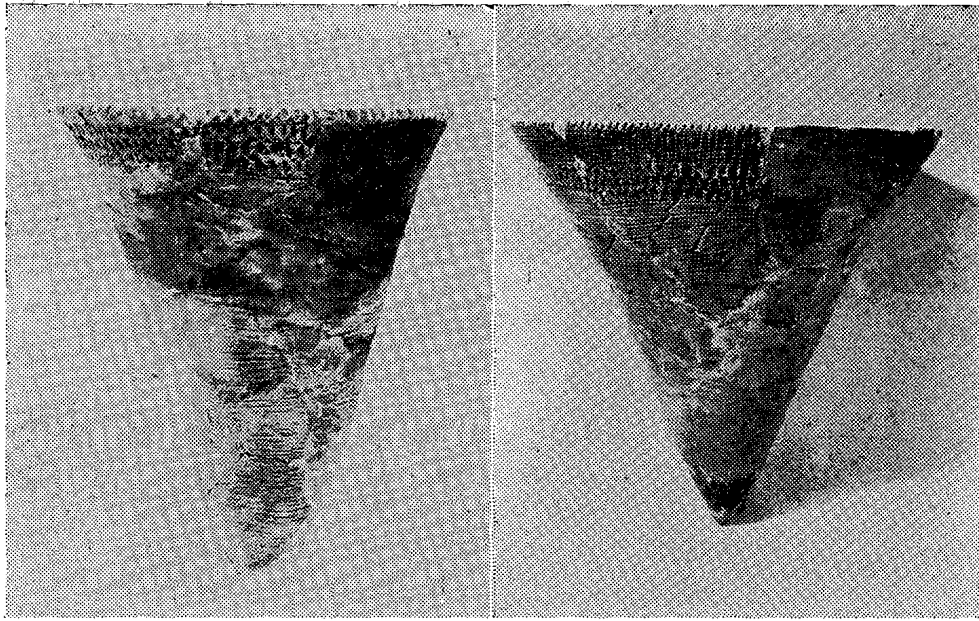
しかし今日までの調査結果では、田戸住吉町系文化の中では、白浜遺跡、館平遺跡などで發掘された白浜式土器が最も古形式のものと思われ、これにつぐものは小船渡平遺跡、館平遺跡から發掘された小船渡平式であろうと考へられ、次に下松苗場遺跡、蕪島遺跡で採集されているような土器形式を経て吹切澤遺跡や高館基地内旧火藥庫附近遺跡などで出土の吹切澤式土器へと推移し、吹切沢式以後のものとして下北郡東通村尻屋物見台遺跡発見の物見台式土器、高館基

地ゴルフコース内發見の田戸上層式類似の土器などがあり、貝殻腹縁文の施文されたこの系統の最末期のものとして三戸郡名川町森ノ越館場遺跡で發見された土器が考へられる。

以上は土器の器形などから考へた変遷であつて、以上の形式相互の間で、一遺跡から層位的に出土例は全くなく、稻荷台↓拜島↓井草の想定が逆であつた如く、逆でないまでも、白浜↓小船渡平↓下松苗場↓蕪島↓吹切沢↓物見台(高館)↓館場の形式推移の想定は、今後の新遺跡發見によつて、若干の増補改訂は起り得るものと考へている。

これら各形式の特徴は日本考古學講座第三卷、其他で筆者が何度か記したところであり詳細は省略するが、白濱式、小船渡平式は口縁は平縁のものが殆どで、器形は圓錐形である。白濱式は口縁部に數段刺突文帯をめぐらすものが多く、その下には徑四纏内外のサルボウの背の中央の筋二條乃至三條を使つて口唇部に平行に土器面を引搔いて施文した。二條乃至三條平行に引かれた整然たる貝殻條痕文が施文されているものが多い。(第二圖寫真参照) この土器の内面はに條痕のあるものは殆ど見られない。

吹切沢式は器形が砲弾形をなし、底部が乳嘴状をなすものもある。口縁は四つの波状口縁をなす。なおこの形式で注意すべきは、白濱式、小船渡平式には絡條帶壓痕文の施文されたものは認められなかつたが吹切沢遺跡の出土の土器片中には絡條帶壓痕文の施文されたものがあることである。二等邊三角形、五角形の石鏃は白浜、小船渡平、館平遺跡でも發見されているが、それらはすべて長さ四纏以下のものである。ところが吹切沢遺跡からは五纏以上の長さのものが四本發掘されている。この石鏃はスモール・ブレードに加工をしたものと思われる。絡條帶壓痕文とこの石鏃の存在は



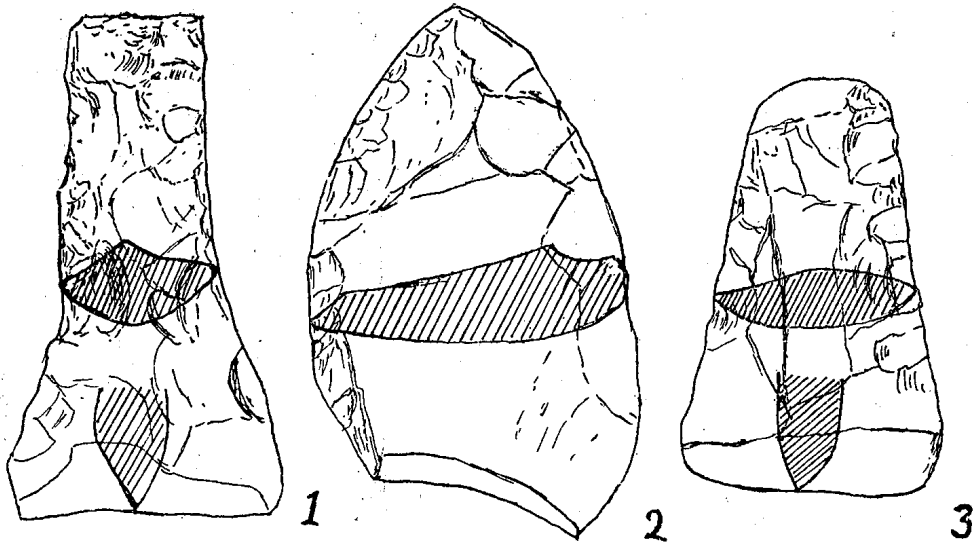
第二圖 青森縣三戸郡大館村新井田字館平

吹切沢式の土器は白浜式系統の文化に何か他系統の文化が加つたものではないだろうか、筆者はムシリ下層の土器を考へ、浦幌式土器文化系統の影響を受けているのではないかと考へている。また吹切沢からは一片ではあるが撚糸文を施文した土器片も出土している。即ち田戸住吉町系の文化が傳播して、白浜↓小船渡平↓下松苗場と時代が下降するに従つて、この地方に他地方に傳播した最古の土器文化も傳播して、それらと融合してゆく状態が見られるのであろうか。

物見台式の土器は口頸部が内彎し、口縁に向つて再び外反する屈曲に富んだ尖底土器で、口唇部も大きく四つの波狀口縁をなすと共に、住吉町式にも見られるように、この波狀口縁の突起の中間に小突起を附して、大小八つの突起部を附したものもある。またこの形式の土器は口縁内側に貝殻腹縁の圧痕文を口唇部と略直角の方向に連續施文したものである。筆者は住吉町遺跡出土の貝殻腹縁文と沈線文からなる古形式の土器が物見台式に併行し、サルボウの背の頂點の圧痕文を施文した、貝殻背文ある土器は物見台式より新しい時期のものであると考へる。筆者は住吉町出土の貝殻文ある土器を以上の如く新舊二形式に考へ、住吉町Ⅰ

| 關東・奥羽・北海道・繩文文化早期の編年比較表 | 北海道渡島 | 奥羽北部 | 奥羽南部 | 關 東 | 芹澤長介氏の關東編年 |
|------------------------|--------------------------------|--|-------------------------------------|--|--|
| | 春日町 ↑ 住吉町Ⅱ? ↑ 住吉町Ⅰ | ムシリⅡ? 飴場 ↑ 物見台 ↑ 吹切澤 ↑ 下松苗場 ↑ 小船渡平 ↑ 白濱 ↑ ? | 素山Ⅱ? ? 素山Ⅰ? ? 常槻世? 層 素木山下層 | 三ヶ月山 ↑ (十) ↑ 茅山 ↑ 野島 ↑ 子母口 ↑ 田戸上層 ↑ 田戸下層Ⅱ ↑ 田戸下層Ⅰ (三戸) ↑ ? ↑ 花輪台Ⅱ ↑ 花輪台Ⅰ ↑ 稻荷台 ↑ 夏島(拜島) ↑ 井草Ⅱ・大丸 ↑ 井草Ⅰ | 茅 山 ↑ 子母口 ↑ 田戸Ⅱ ↑ 田戸Ⅰ ↑ 三戸 ↑ 平坂・花輪台Ⅱ ↑ 大浦山・花輪台Ⅰ ↑ 稻荷台 ↑ 夏島 ↑ 井草Ⅱ・大丸 ↑ 井草Ⅰ |

第 三 表



第三圖

1.2. 青森縣三戸郡大館村新井田館平出土
3. 青森縣三本木市切田出土

式、Ⅱ式と假稱したもので、大場利夫氏の住吉町下層式と上層式と同一のものではない。

筆者は縦長の上端の両側からノッチを入れた柄部のある石小刀は、貝殻背文の施文された住吉町式以降にあらわれるものであると思つてゐる。青森縣では物見台式までの諸形式には柄部のある石小刀は出土していない。

白濱式に見られる如き口縁部に數段の刺突文、または櫛齒で施文したような貝殻腹縁文を帶狀に施文した土器は、東北アジアを始め北ユーラシア大陸に廣く分布する古式の櫛目土器にも一般的な文様である。また白浜式土器出土遺跡から出土の綠色の水成岩質の硬い岩石を擦截して製作した擦截磨製石斧。細長い二等邊三角形、または五角形の石鏃、トランシェ（Tranchet）またはカンピニアン・アックス（Campignian-axe）と呼ばれる石篋狀の直刃斧、（第三圖1・3）横刃のスクレイパー（第三圖2）など多くの剝片石器（Flake-tool）は大體のものが櫛目土器文化の古形式の時期の特徴的な石器であり、トランシェの如きは北歐の中石器時代末の特徴的な石器である。

このように觀察すれば白浜式文化は東北アジア大陸の古い櫛目土器文化が東北日本に傳播して成立したものであるとの推察がなし得るのであるが、今日シベリア方面の櫛目土器文化の遺跡の調査はバイカル湖畔以東では未だ見るべきものがなく、今後沿海州方面の遺跡の調査研究がなされるまで、北海道西南部から奥羽北部に亘る田戸住吉町系の最古の遺跡が究明され、その遺物の全容が明らかになつても、大陸文化との直接の結びつきを究明することは困難であろう。

青森縣三戸大館村館平遺跡の南側の低い台上、同村大字十日市字赤御堂には縄文の施文された尖底土器の貝塚が昨年夏發見された。

この土器は内面に條痕もなく、纖維も含有せず、ムシリ上層發見の内面に條痕文ある縄文の施文された尖底土器より古形式のものと考へられる。官古市欽ガ崎町雲南前からも中島隆氏が撚糸文の施文された纖維を含まない尖底土器を發見されている。

また福島縣石城郡根本遺跡では纖維を含有した稻荷台式近似の土器が出土している。

筆者はこれらはすべて井草系の文化が北へ傳播してできた遺跡であり、年代は夏島、稻荷台式などよりも下降した時期のものと考へている。この縄文系の最古の文化と、田戸住吉町系文化との先後關係、併行關係などはまだ皆目不明である。ただ今日注意すべき資料として吹切沢遺跡から撚糸文の施文された小土器片が一片出土したこと、白浜、小船渡平、館平には數片づつではあるが粗い縄文の施文されたものが出土したこと（館平發見の破片は刺突文、沈線文ある土器の胴部に見られる）など、今後の研究に重要な問題を持つものようである。

また今夏赤見堂貝塚の發掘調査によつて、幾多の新知見を得ることができると考へる。浦幌、上坂、ムシリなどの平

底の古形式土器、オホーツク海岸に分布圈を持つて押型文尖底土器。西九州に分布する會畑式など縄文文化の周邊文化についても、若干記す予定であつたが紙數を非常に超過してしまつたので、これらについての研究は次回に譲ることとする。

註

- (1) 赤星直忠、相模三戸遺跡 考古學雜誌第19卷11号・昭和4年11月。
- (2) 伊東信雄、宮城縣遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告・東北帝國大學法文學部奥羽史料調査部研究報告二・昭和15年3月。
- (3) 江坂輝彌、東北(日本考古學講座3卷各地域の縄文式土器) 河出書房・昭和31年2月。

三、むすび

以上わが國の縄文文化成立の基礎をなした井草系文化、廻轉押捺文系文化、田戸住吉町系文化の起源を探り、これらの異つた系統の文化が本州を中心にどのように分布し、各々の文化がどのように流れ、どのように融合してゆくかを究明すれば縄文文化の成立も自然に明らかになされてくるのであるが、まだ各地域における地域的な研究は不十分な地方が多く、これが完全に究明されるまではまだ相當の歳月が必要と考へる。

また今日判明せる範圍を記すにしても、一系統の文化の追究のみでこれ以上の紙數が必要となり、本稿では到底この記載は困難であり、縄文文化の起源をなす三系統の文化の分布範圍と、それぞれの文化の變遷についてのみ紹介した。

早期中葉以降に奥羽、關東、中部でのこれらの文化が融合し、始めて日本独自の縄文文化が発生すると考へられるのであるが、前記した如く、未だ解明されざる點が非常に多く、今回は縄文文化の起源をなしたと思われる三系統の文化

の日本における最古の文化の究明についてのみ記した次第である。なお一步をすすめて、田戸住吉町系文化と井草系文化の故郷の地も究明してゆきたいと考へるが、アジアの環太平洋岸の諸地域の考古學的調査は始ど未開拓のところが多く、すべて今後の調査研究に俟たなければ、東アジアの環太平洋岸の古代文化の交流など輕々しく想定できない状態にある。

Pebble-tool のみでしかも局部磨製の石器があり、繩文、撚糸文の施文された土器を伴う文化に、北部ヴェトナムのバクソニアン文化があり、マンシュイ (Mansuy) はこの文化を原新石器文化と呼んでいる。最近までの研究ではこの文化がタイ、マレー、スマトラ、インドネシア方面にも及んでいることが判明してきている。

わが國の Pebble-tool を中心とした土器文化には井草系文化と北海道押型文化がある。古いこれらの文化が、東南アジアの Pebble-tool 文化と如何なる關係にあるか、今日の研究では皆目見當のつかぬところであるが、調査の進歩と共に、これらの流れも次第に明らかにされるものと期待している。

また東北アジアの櫛目土器文化の遺跡探査が沿海州方面にまで進められた時、わが國の田戸住吉町系文化と大陸文化の關係も次第に明らかにされるものと考へる。

本稿執筆にあたっては、今日の研究結果を一應まとめるつもりで筆をすすめたのであつたが、淺學菲才のため思うにまかせず、多々加筆補正したいところが目に止り、甚だ不備なものとなつてしまつた。讀者各位に深くお詫びすると共にそれらについては稿を改めて補正したいと思う次第である。

昭和31年6月15日稿

尙本稿は江坂に對する昭和二九年度文部省科學研究助成補助金による研究の一部である。